

# 山と博物館

第13巻 第9号 1968年9月25日 大町山岳博物館



## ライチョウの人工飼育に思う

トキ、コウノトリなど国際的な珍鳥が、日本の国土から年ごとに姿を消していく。特別天然記念物に指定され、長野県の「黒鳥」でもあるライチョウもその一つ。本州では北アルプスや高山地帯の閑寂だが、最近の登山ブームや高山地帯の開発で次第に安息の地を追われ、その数は減る一方である。

『なんとか保護の手を加えて、一羽でも多く後世に残したい』これは愛鳥家ならずともひとしく願うところだが、市立大町山岳博物館では、こうした期待にこたえて、目下懸命にライチョウの保護、増殖と取り組んでいる。

研究に乗り出してから六年目、ことしは北ア爺方岳(二六九九m)で親子のライチョウを夏の間だけ飼育する計画を立て、七月中旬、親鳥二羽(メス)とヒナ八羽のエッグに成功した。これらのライチョウは、高さ一・三m、金網製の飼育舎に入れられ人工飼料で育てられているが、生育はいたって順調で、野生のものよりやや大きいそうだ。八羽のヒナは間もなく下山、同館に移されるが、係員の異常なまでの熱意にもかかわらず、研究の見通しは必ずしも明るくない。この研究を成功に導くには、温度や湿度が自由に調節できる人工気候室が必要だが、最低二百万円くらいかかるため、貧弱な同館の予算では手も足らないのだ。

この研究は、もともと国、県からの委託事業。ことしから補助事業に切替えたが、それでも大町市が計上した研究費は百七十万円(うち国、県から百十万円補助)とても必要な施設づくりまでは手が回らないというわけだ。それにしてもこれだけの研究に、県からの補助金がわずかに二十五万円余というのはあまりにも少なすぎる。これでは「黒鳥」の名前が泣く。国との補助金の配分の問題もあり、それがそれならそれで国に増額を要求するなり、もっと積極的な姿勢がほしいライチョウが「マボロシの鳥」となってしまうからでは、すべてがあの祭りである。

(毎日新聞長野支局長・村山武次)

# アンデス登攀

## サルカンタイ南稜

武田睦男

**出 発**  
私達のアンデス遠征隊の主目標は、サルカンタイ(六二七〇呎)の南稜の登攀がその主である。

サルカンタイはペルーアンデスの中にあり、タスコより北西八〇キロ、コルディエラ・ピルカパン山群の最高峯である。

サルカンタイはすでに三回登頂されているが、初登頂は一九五二年フランス・アメリカ合同登山隊によって北西の氷河から成功している。

第二登は一九五六年、フランスのトレイ隊の東尾根よりの登頂、第三登は日本の同志社大隊が一九六五年に北東尾根より登頂に成功している。

そして、今度の私達の隊は「未登の南稜」を目指して登ることになった。南稜より張り出した尾根は、ちょうどノコギリを立てかけたように多数のギザギザの小ピークがあり、しかも非常にやせたナイフのような尾根である。

私たちはキャラバン二日目にB・Cの手前、この南稜をはじめ見た時、その様相に圧倒された。

### 入 山

六月二十一日夕刻、後発隊の我々はペルーのカヤオ港に到着、通関手続の關係で船に泊、二十二日朝三十二日間お世話になった船

の人達に別れをつけペルーへの第一歩を踏み出した。

二十二、二十三日は土、日曜となったのでペルー文部省アンデス局のセザール・モラレス氏と、日本大使館への挨拶が二十四日になった。

二十五日、タスコの飛行機に乗ることになった。その間、カヤオ港に着いた時から、タスコに発つまでのすべてをエンリケ・レオン君(リマの工業大学生で同大の山岳部長をしており、我々はリキさんという愛称で呼んだ)が面どうをみてくれたので、大変便利であった。

二十三日の日曜日には長野県人会の青木さんにリマ市内を案内してもらい、西沢さん、丸山さん(同じく長野県人会)宅へも伺わせてもらった。みないい人ばかりである。

二十五日早朝、眠い目をこすりながら、タスコへの旅の仕度をととのえてリキさん待った。リキさんは予定時間より十分ほど遅れてタクシーでかけつけ、荷物をすばやく積み込ませると、フロント！フロント！(早く、早く)と早朝の人通りの少ない市内を飛行場に向って車を急がせた。

七時十分前、飛行場に着き、すぐ飛行機に乗り込むと階段ははずされ、直ちに滑走路へと動き出した。七時二十分、私達後発隊を乗せた日本製のYS11型機はリキさんの見送る

中をタスコへと飛び立った。  
「リマからあな方の成功を祈っているよクガンバレ、サルカンタイ」とリキ君は再会を祈ってくれた。

一時間ほどすると飛行機は大きなサルカンタイの横を通過しながらタスコの飛行場へ到着した。

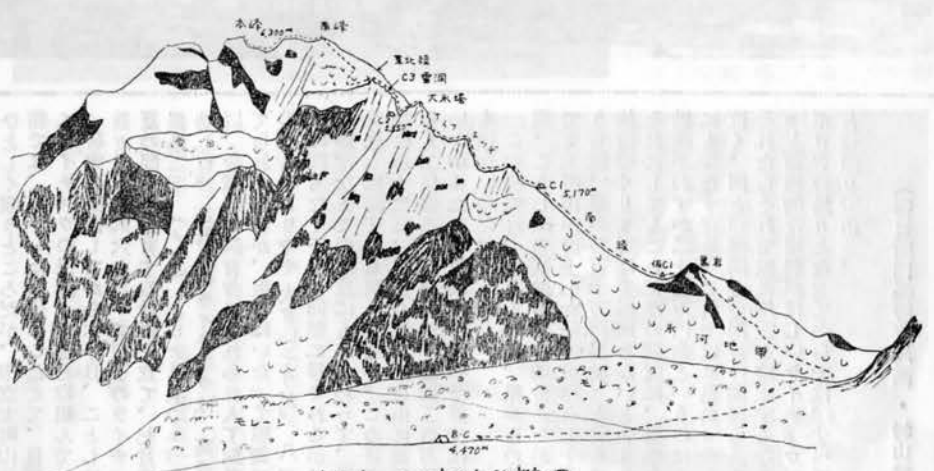
先発隊の状況はリマ市内で、リキさん及び青木さんによって聞かされた。それによると六月十一日カヤオ港に荷物と共に到着した先発隊は、三日後の十四日に登山隊の全荷物を受け取ることができ、さっそく丸山さん方の仕事場の庭へ運び込まれ再梱包されて、十六日に牧野・朝日両隊員がポーターのモラレスをともなつて、荷物と共に自動車でリマを発っていった。

続いて十七日加藤幸彦隊長と山本隊員が飛行機でタスコへとび、タスコで仕事を済ませて、山本隊員は十九日ビンコパタへ、荷物隊と隊長が二十日ビンコパタへ到着した。B・Cへの荷物の運搬を開始したとのことであった。

私達後発隊は一刻の猶予もなくタスコの大村さん宅へ寄り、登山装備に変えて、すぐ先発隊の待つビンコパタへと車をとばした。

モエパタまでは八十キロ、約二時間。モエパタからビンコパタまでは徒歩で約二キロ、リマからビンコパタまで一日で先発隊の待つキャンプへ到着した。

しかし、我々を待っていたのは、山と積まれた荷物と山本隊員一人であった。私達の到着を知った彼の喜びようはなかった。そしてすぐ先発隊の状況を話してくれた。隊長と牧野隊員はすでに三日ほど前からベ



サルカンタイ南稜登攀図

ースキャンピングに入りC・1へのルート作を開始し、今日は昼からブローの後を追って朝日隊員がベイスキャンピングへ出発した。ベイスキャンピングまでの距離はブローが早く来て荷物を積んで出かければ一日、ブローが遅く来ると一日半かかる。明日はブローが何頭来るかわからないが、二十頭位くれば全部の荷物を運ぶことができると思う。」

私達のキャンピングはビンコパタのアッシュエンダーのモンテスー家の前の草原に張ってあり



B・Cより望むサルカンタイ

近の子供たちが時々遊びにきて、遠まきに隊員達の行動を珍らしそうに眺めている。

そして隊員から菓子やアメ、チョコレートなどもらっては帰って行く。

アッシェンダーはこの付近の実力者で、いわば殿様である。アリエロ(馬方)の手配などすべてこのアッシェンダーを通さないと何もない。

先発隊の山本隊員は十九日から単身でこの地に入ってきていたので、モンテスレー家のアミーゴ(友人)になってしまっていた。

このモンテスレー家には、日本の同志社大もお世話になったそうである。

手配してくれたブローは一頭一日四五ソール(一ソールは八〜九円)、アリエロ一日三十ソールである。

26日、ピンコバタに着いた翌日、二組のアリエロが十九頭のブローを連れてきたので、

付荷物を全部積むことができた。朝遅くにきたので出発は十一時になってしまった。

ブローの足は早い、副隊長が一頭のブローに乗ったが他の隊員はブローの後について歩かねばならなかった。ひと山越す頃にはすっかりバテてしまつてブローよりずっと遅れてしまった。

ソライの部落に着いたらもううす暗く時刻は七時になっていた。そして、そこにはすでにテントが張られ、アリエロ達はブローから荷物をおろしてまとめてあり、野営の仕度はすっかりできあがっていた。

ソライ部落(三八〇〇呎)からインカチャリヤスカ峠下のベイスキャンプ(四五〇〇呎)まで、高度はぐんぐん下りまわっている。ブローの足で三時間、私達の足で四時間位かかるだろう。

今日も昨日と同じくブローからだいぶん遅れてしまった。四〇〇〇呎を越えようと、息切れが激しく足の動きもにぶってきた。

ベイスキャンプを目前にした時、早くもアリエロ達がブローを連れて引き返してきた。「セニョール、グラシアス(だんな、ありがとう)」「アディオス、セニョール」とそれぞれ別れの言葉をかわし握手をして帰って行った。ベイスキャンプには全隊員の顔が集まっていた。日本をでてから二か月ぶりである。

テントの中は笑い声やら話し声やらでにぎやかである。ビスコ(ペルーの酒)とビノ(ブドウ酒)で乾杯をした。

#### 前進キャンプ

翌日からさっそく荷揚げが始まった。先発隊が氷河を越え約四九〇〇呎の黒岩までトレースをつけておいてくれてあった。一人十五キロ程度程度の荷物であるが、すでに高山病の症状が現れはじめ、ひどい頭痛と吐き気がして、その上足が重く息苦しい、四九〇〇呎の黒岩まではうようにして登った。ノーンや新グレランなどを飲みながらの行動が続く。高山病の症状も一週間で止んだ。

六月二十九日、四九〇〇呎の黒岩に仮第一キャンプを建設、二人の工作隊が入った。続いて七月一日、約五二〇〇呎に第一キャンプを建設して本格的な前進キャンプができあがった。

ベイスから黒岩まではモレレン地帯と氷河地帯である。黒岩から第一キャンプまでは急ではあるが広い尾根となっている。第一キャンプより上部は多数のピークをもった急で非常にやせた稜である。

七月四日には約五三〇〇呎の大氷塔の下部まで(C・1より三時間)進み、いよいよ最大難関の突破工作にかかるところまで達した。しかし、午後から急に空が曇ってきた。ついに三時頃から小雪が降りだして来た。

雪はいっ止むともなしに降り続き、五、六日でC・1は約一呎も積った。

七日、ようやく晴れ上り、C・1から上部へのトレースに二人、C・1から下部へ二人が逆トレースをつけるために行動を開始した。雪崩のことが非常に心配されたが、無事トレースを完了して、ベイスからの荷も順調に上ってくる様になった。

七月十一日、約四日間大氷塔の突破工作に費し、ようやく大氷塔を越えた。次の第二キャンプ(五三三〇呎)を建設することができ

た。このテントサイトは非常にせまく、山側の雪を相当切り取って入口とし、二人用のテントをやっと張った。

#### アタック

第二キャンプから上も相当に悪く、南峯からのプラトリー(雪の台)がすぐ目の前に見えていながら遅々として進まない。

一日わずか一ピッチという日もあった。

そして七月十五日、五五〇〇呎の地点に半雪洞式の第三キャンプを建設して、翌十六日最後のプラトリーまでのルートを完了した。

これで南峯の登攀は事実上完了したことになる。あとはただ主峯へのアタックだけである。

七月十七日、朝六時、加藤英副隊長、曾我隊員がアタックに向かった。又第二キャンプからは加藤幸隊長、朝日隊員が第二次アタック隊として頂上へ向かった。

十二時、加藤英副隊長からトランシーバーで「南峯の頂上に着きました。主峯にはおそろく午後一時前後になると思っています。」と伝えてきた。

双眼鏡でみると一人見え、また一人見え、次々に四人の姿が南峯の上に立っては消えて行く。主峯へは稜線の向う側をまいて行くのだ。

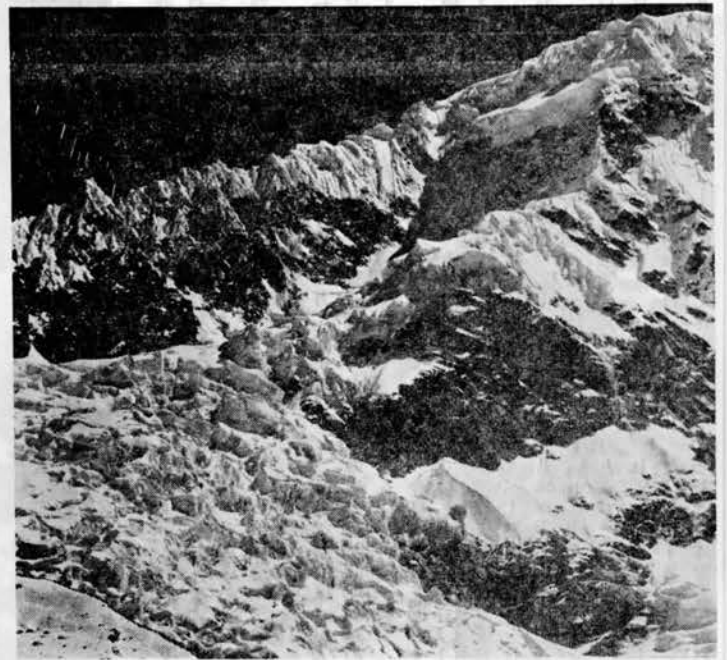
南峯から主峯の間のコルへの懸垂下降を終ってから、ようやく稜線にアタック隊の姿が豆つぶのように見えてきた。しかし、今まで晴れていたのが急に曇りがでてき、ちらちらと姿を消してしまふ。

雲の間を見えつかくれつしながら四つ豆つぶが頂上に向かってゆっくり進んでいく。

「アタック隊より、各局感度ありますか。」トランシーバーが呼び続ける。「七月十七日午後一時二十分、サルカンタイ南稜より、六二七〇呎の主峯に加藤副隊長が立ちました。あとから三人が続いております。」

雲が上昇気流に乗って頂上に吹き上げていく。西の方から次第に天候がくずれだし、つ





ノコギリの刃のような南稜

いに雪が降りだしてきた。  
「アタック隊ーアタック隊ー感度あったら  
応答せよ」第一キャンプからアタック隊を呼  
び出したが応答がない。「B・Cの状況はい  
かがですか」

「B・C付近は先程より急に曇ってき、早く  
も雪が降りだしてきました。先日の降雪時と  
似たような状態だと思います」「こちら第一  
キャンプも降雪になり、悪い状態になってき  
したので、アタック隊を呼びだし早急に下  
山するようにしたいと思いますので、こちら  
から連絡してみます」「了解しかし、第一キ  
ャンプからの呼び出しにアタック隊は何の応  
答もなく、待機する隊員もいらしてきて  
「第一キャンプよりアタック隊へ、一方通行  
で連絡します。天候の状態が先日の降雪時と

同じ状況になってき  
ましたので、至急下山し  
て下さい！」トランシ  
ーパーはくり返しくり  
返し同じ事を呼びかけ  
続けた。

夕方アタック隊より  
のトランシーパー連絡  
が入った。「頂上に立  
ってしばらくすると急  
に吹雪に変わりましたの  
で、トランシーパーで  
連絡するひまもなく、  
急いで下山しておりま  
したので了解下さい。  
現在ようやく第三キャ  
ンプに到着しました」  
と無事を伝えてきた。

ついにサルカンタイ  
の南稜登攀に成功した  
のだ。途中二、三日の  
降雪で行動は中断され  
たものの、その後の好

天が成功につながったといえる。  
三日間で全キャンプを撤収して全員無事ベ  
ースキャンプに戻ってきた。  
真黒に日焼けした顔が明るく、皆思い思い  
に日本へ手紙をつづっていた。

(ヘルマン・アンデス遠征隊員・大町山の会)

### 博物館だより

#### 雷鳥の現地飼育

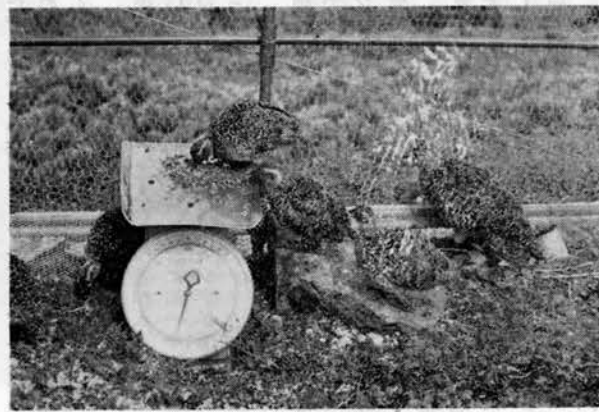
本年六月二十七日に奥探しに入山して以来  
三か月にわたって、北アルプス爺爺岳(二六  
六九尺)種池小屋付近で進められて来た当館  
のライチョウ現地飼育事業は、延三七〇人の  
出動を終って近日中に終了する。

順調に育った雛鳥八羽と雌親二羽の計十羽の

ライチョウは近く低地へ移送され、山岳博物  
館において低地飼育が行なわれることになっ  
ている。

本年度は現地育雛によって、天然餌による  
育成と人工餌による育成の比較が行なわれ、  
人工飼料改善の資料が得られた。また、明年  
度の人工気候室建設に備えるため、育雛期に  
おける高山の微気象とライチョウの行動につ  
いての観察が進められた。

体重測定(爺爺岳に)



#### カモシカの幼体受け入れ

九月一日、和歌山県新宮市でカモシカの幼  
体(生後間もないもの)が保護され、六日山  
岳博物館に移送された。

このカモシカはメスのカモシカで那智山(九〇九尺)の山道に坐っていたのを同市佐野  
の小泉輝夫さんが発見し保護したものである  
十八日現在体重二・五キログラム、毎日山  
羊の乳を元気に飲んでる。



お願い「山と博物館」の購読者をつのっ  
ております。年間三〇〇円(送料共)大町  
山岳博物館宛お送り下さい。(切手は不  
可) (郵便番号三九八)

#### 表紙説明

サルカンタイのB・Cと無名峯

撮影 武田陸男

山と博物館 第13巻第9号

一九六八年 九月二十五日発行

発行所 長野県大町市T.D.L大町②〇二一

大町山岳博物館

印刷所 大町市下仲町

大糸タイムス印刷部

定価 年額 三〇〇円 (送料共)